

2020年の球磨川流域豪雨災害から河川法の根本的問題を問う

～ 温暖化が猛烈な集中豪雨をもたらし、河川法が災害を激甚化させた ～

I 川辺川ダムがあれば：作り話でしか正当化できない川辺川ダム建設

マスコミは豪雨災害発生の翌日から「川辺川ダムがあれば」の大宣伝を始めた。そして国と県は検証と称して、川辺川ダム建設に必要な事象づくりに取り組んだ。これが治水の専門家集団のやることかと思ふような作り話をヘドロだらけで復旧に取り組んでいる住民に向けて繰り返し垂れ流した。その典型が「川辺川ダムがあれば人吉市街地の氾濫は6割カット出来た」とか、「流水型ダムで命も清流も守れる」とか、「川辺川ダムで本流の水位をさげれば支流の氾濫は防ぐことが出来た」という作り話である。

II 被災した住民が球磨川流域豪雨災害の実態解明に取り組む：ダム治水では救えない命

亡くなられた方はどこでどうして命を落とされたのかに関する調査、なぜ命を奪うような急激な増水や流れがその場所で生じたのかに関する調査、急激な増水や流れを形成した氾濫水はどこからどのようにこの場所に来たのかに関する調査、命を奪うような激しい洪水や氾濫が流域全域ほぼ同時に発生しているその要因は何か、等々に関する調査から得た事実から見てきたのが河川法に基づいて施工されたさまざまな治水建造物が災害を激甚化させている姿であった。

旧来、治水の専門家の方たちを中心に展開されていたダムか堤防かに関する論争の枠をはるかに超えた災害の姿であった。河川法が掲げる基本高水治水そのものが問われる豪雨災害であった。

III 球磨川水系河川整備基本方針の見直しが露呈させた深刻な問題：温暖化無視の川辺川ダム

温暖化による気候変動に伴う基本高水の見直しを掲げながら、2020年球磨川流域豪雨災害は蚊帳の外に置き、1972年の豪雨を持ち出し川辺川ダム建設が必要とする数値合わせを行っただけのものであった。温暖化に伴う豪雨災害の特徴は1時間に80ミリ前後の雨が数時間に集中して降り続く猛烈な豪雨となり、この豪雨が降った流域に即激甚な災害を引き起こすようになった。この現象に基本高水治水は全く対応できなかったことを2020年の球磨川流域豪雨災害が教えてくれている。

IV 球磨川水系河川整備計画のいかさま：逃げ遅れゼロ対策が治水の柱に

河川整備計画は流水型ダムで命と清流を守るという話は川辺川ダム建設のための単なる作り話でしかなかったことを暴露させた。そして「命は自己責任で逃げて守るもの」ということを河川整備計画の中央に鎮座させている。このようないかさまがまかり通るのは洪水による災害は基本高水治水で防ぐという河川法と関連する法律が存在しているからである。

V 被災した流域住民が川辺川ダム建設反対の先頭に立つ：“川は悪いことをしていない”

球磨川流域総合開発の名目で下流域に荒瀬ダム・中流域に瀬戸石ダム、そして上流域には多目的の市房ダムが建設された。この三つのダムが球磨川と流域住民にもたらしたものは球磨川に依存していた豊かな暮らしを奪い、川の景観を奪い、川のつくりを壊し、川の流れを壊し、生き物を次から次へと消滅させ、災害防止のためにと持ち込まれたダムと連続堤防が災害を激甚化させ、水量を激減させヘドロ川への転化であった。2020年7月4日、過去に一度も経験したことのない温暖化による猛烈な豪雨災害に遭遇した。それでも被災した多くの住民は国や県の作り話にはのることもなく、自然が育む豊かな球磨川とともに暮らせる流域全体を含めた地域づくりを求めている。山河の破壊こそ豪雨災害の根源的要因であることを流域住民は認識しているからだ。河川法改正は必然の課題である。